



イベント

5月27日午後、アメリカ人チャールズ・ヘンリー・リッグス氏 (Charles Henry Riggs) の子孫らが南京を訪れ、リッグス氏が生前に中国政府から授与された「采玉勳章」を含む貴重な歴史資料8点(セット)を記念館に寄贈した。「采玉勳章」は87年前、リッグス氏が日本軍の暴行を阻止し、中国人難民の保護に貢献したことを物語っている。「采玉勳章」の寄贈は当館にとって初めてのことである。



当館館長周峰(右)からリッグス氏の孫スティーブン・ハンキンさん(Steven Hankin)に寄贈証書を贈呈



リッグス氏の孫スティーブン・ハンキンさん(左)とダービット・ハンキンさん(右)

5月18日の国際博物館の日に、記念館で「平和のために--フランス人画家クリスチャン・ポアロ氏 (Christian Poirot) 油絵展」が開幕した。展示は「南京の痛恨の叫び」「ポアロの目に映った南京」「中国と外国の架け橋」の三部分、合計44枚の油絵を展示し、中仏両国人民が歴史を忘れず、平和を大切に、未来を切り開くことを表現している。今年3月18日、展示の準備中に、ポアロ氏は急病で倒れ、63歳の生涯を閉じた。当館は彼の最後の願いを完成させた。



展示のPR看板



ポアロ氏の娘さんが画展に参加

第29回世界図書デーには、記念館のロードショーホールで「記憶の声のバトンタッチ」活動が行われた。南京大虐殺の歴史記憶の継承者、当館の歴史教育担当、紫金草ボランティアなど5人の代表が『ラーベの日記(青少年版)』の一部を順番で読み上げ、感想を話し合った。



『ラーベ日記』を読み上げる五人の代表

幸存者の情報

南京大虐殺幸存者の劉素珍さんは、4月21日に93歳でこの世を去った。劉さんは1931年11月に生まれ、3歳の時に父を亡くし、祖父母と一緒に南京市珠江路吉兆宮同仁街に住んでいた。1937年に南京大虐殺が起こった時、劉さんはまだ6歳で、日本軍に熱湯で右腕をやけどさせられた。



劉素珍さん(右)の生前の写真

今から86年前の1938年4月30日、米国オハイオ州シンシナティで出版された『クラスメート』は、『ヴォートリン日記』を詳しく紹介した。南京大虐殺の間、アメリカ人のミニー・ヴォートリン氏と中国人の程瑞芳氏は、金陵女子文理学院を守るために南京に滞在していた。どんなに忙しい時期も、お二人は日記を書き続け、日本軍が行った残虐行為の詳細を同時に記録した。



『クラスメート』で紹介したヴォートリン氏の話



歴史記憶の継承

アメリカのサンパウロ市立病院看護学校を卒業したエヴァ・ハインズ氏は、1912年に中国に渡り、1924年に鼓楼病院で看護師として働き始めた。南京大虐殺の間、ハインズ氏は病院で新生児の世話をした。未婚の彼女は母親ではなかったが、多くの子供たちの「母」になった。看護師の日と母の日に、AIを使ってハインズのモノクロ写真に色を塗り、この素晴らしい女性を偲んだ。



AIで再現した赤ちゃんの世話をしているハインズさんのカラー写真

訪問者の声

メーデーの5連休中、記念館を訪れた日本人の「笹田」さんから、「日本では虐殺のことがここまで詳しく知られていませんが、今日ここに来られて知ることができてよかったです。日本人として、こういうことがあったことを忘れないでいきます」とのメッセージを書き残した。



現在中国の同済大学で留学中のスペイン人見学者アドリオンさん(中国名:王明知)は、「南京大虐殺の歴史を学ぶためにここに来た。第二次世界大戦の歴史をもっと知りたい。私は南京がとても好きだし、記念館はとても意味のある場所で、平和の大切さを教えてくれる。平和はどの国にとっても大切なことだと思います」と語った。

